

## 音源の比較試聴(56)

### —シューベルトのピアノ五重奏曲《ます》—

#### 1. 始めに

前報(55)に引き続き、各種音源の再生経路に関する仮想アースとアースアキュライザーや OPT ISO BOX や LAN iPurifier Pro などを含む種々の対策の効果の確認のため、各種音源の比較試聴を実施します。

#### 2. 音源の比較試聴の試聴方法と音源

アナログ関係の対策の経過は前報(27)でも延べたとおりで、配信や CD 再生の光アイソレーションなどの対策は fidata HFAS1-S10 の活用シリーズや OPT ISO BOX の導入シリーズや LAN iPurifier Pro で報告してきました。

今回、同じ曲のアナログ盤、CD、STAGE+およびベルリンフィルデジタルコンサートからの配信を比較試聴します。

アナログ盤は下記を使用します。

##### PHILIPS X-7843

フランツ・シューベルト ピアノ五重奏曲イ長調 D. 667 《ます》

アルフレッド・ブレンデル (ピアノ)

クリーブランド弦楽四重奏団

##### 日本コロムビア MS-1067-AX

フランツ・シューベルト ピアノ五重奏曲イ長調 D. 667 《ます》

マンハイムピアノ 5 重奏団

##### RCA RVC-2125

フランツ・シューベルト ピアノ五重奏曲イ長調 D. 667 《ます》

ピーター・ゼルキン (ピアノ) 他

CD は下記を使用します。

##### Sony Records SRCR-2293

フランツ・シューベルト ピアノ五重奏曲イ長調 D. 667 《ます》

アンナー・ビルスマ (チェロ)

ジョス・ファン・インマゼール (フォルテピアノ) 他

##### PHILIPS PHCP-1464

フランツ・シューベルト ピアノ五重奏曲イ長調 D. 667 《ます》

アルフレッド・ブレンデル(ピアノ)他

配信は STAGE+ルから上記と同一の曲を選択します。

フランツ・シューベルト ピアノ五重奏曲イ長調 D. 667 《ます》

アンネ=ゾフィー・ムター(ヴァイオリン)、ダニール・トリフォノフ(ピアノ)、ファユン・イ(ヴィオラ)、マクシミリアン・ホルヌング(チェロ)、ロマン・パトコロ(コントラバス)

フランツ・シューベルト ピアノ五重奏曲イ長調 D. 667 《ます》

リサ・バティアシュヴィリ (ヴァイオリン)、ゼバスティアン・クリンガー (チェロ)、Lawrence Power (ヴィオラ)、マシュー・マクドナルド (コントラバス)、ニコ・グヴェターゼ (ピアノ)

フランツ・シューベルト ピアノ五重奏曲イ長調 D. 667 《ます》

エミール・ギレリス(ピアノ)、アマデウス弦楽四重奏団

それぞれの音源は、下記の経路で聴いていきます。

アナログ盤

LINN LP-12→ZANDEN Model 12→Brooklyn DAC+→TruPhase(A)

CD

EMT-981→TruPhase(B)→TruPhase(A)

STAGE+

ルーター→スイッチングハブ→PC→Brooklyn DAC+→TruPhase(A)

### 3. 音源の比較試聴結果

アナログ盤は、レーベルに対応したイコライザー特性で聴いていきます。

アナログのブレンデルとクリーブランド弦楽四重奏団盤は、1977年の録音で盤質はよくありませんが、ブレンデルのピアノが前面に出て力強く牽引します。全般に明るい表情ですが、2楽章では嫺々たるところも聴かせます。

マンハイムピアノ 5重奏団盤は、録音年代は不明で、ジャケットには RIAA と書かれていますが、Columbia カーブで聴いていきました。盤質はあまりよくありませんが、各パートは左右に広がっており、定位もしっかりしていますが、コントラバスが控えめでありながら、凝縮した演奏を聴かせてくれます。

ゼルキンなどの盤は、録音年代は不明ですが、音質は明晰で、定位も、各パートの音のバランスも良好で、緻密で安定した演奏です。

CD のビルスマとインマゼール達の演奏は、1997年の録音で、ピアノではなくフォルテピアノで演奏され、弦もガット弦のようです。フォルテピアノはピアノより立ち上がりがおだやかで音量も控えめであり、弦はノンヴィブラートでしっとりと響き、全体として、アナログ的な雰囲気もあって室内楽しい好ましい演奏です。

CD のブレンデル達の演奏は、1994年の録音で、くっきりと音像がたち、力強い演奏で、コントラバスが明瞭です。

STAGE+のムター達の演奏は、2017年のライブ収録のアルバムです。良くも悪くもムターとトリフォノフの個性が強く、ムター節、トリフォノフ節がぶつかりあいます。演奏速度が速く少し急ぎすぎるようなところがあります。

バティアシュヴィリ達の演奏は、最近の収録で音質がよく、小ホールでのライブ感がリアルです。バティアシュヴィリのヴァイオリンがリードし、ピアノは後方に位置して、よく響いており、コントラバスは明瞭かつ量感があります。

ギレリスとアマデウス弦楽四重奏団の演奏は、かなり以前の収録と思われませんが、ギレリスの力強いタッチとアマデウス弦楽四重奏団のがっちりとしたオーソドックスなアンサンブルで、演奏技量の確かさが示され、予想外にフレッシュな印象を感じとれます。

#### 4. まとめ

アナログ再生と STAGE+からの配信を比較してみましたが、これまでの対策で、すべてにおいてレベルが向上しており、以前のような格差がなくなっており、収録年代、収録環境、音源の媒体に加えて、バラエティに富んだ演奏スタイルの違いがわかります。

以上